

Title	臨床哲学的余白 [Vol.6]
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 6 P.34-P.34
Issue Date	2000
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/7623
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

今回は、会澤久仁子さんのアメリカ・ホスピス研修報告に引き続き森正司さんの報告を掲載するとともに、以前より計画していた「セクシュアリティ」の特集を同時掲載した。その結果通常のページ数を大きく上回ることになったため、春夏合併号という形態をとることになった。

『メチエ』は1998年より臨床哲学研究室の論文集である『臨床哲学』から分かれ、「臨床哲学研究会」の報告や各研究グループの活動報告など行う媒体としてスタートした。「臨床哲学」は大学院哲学講座の専門分野となってから3年目を迎え、学内外からさまざまな関心のもとに人々が集まり、活動の範囲

も多様化している。これまで『メチエ』の企画・編集は本間が全面的に行っていたが、今年4月から本間が助手から講師となったこともあって、『メチエ』の編集方針を本年度からの新しくすることにした。

基本としては、編集総責任を本間が負い、毎号ごとに研究室内外より編集委員を募り、編集委員が原稿を依頼し、場合によっては執筆者も編集に加わって全員で原稿を検討する。またこれまでのように、すでに行った研究会の「成果報告」のみならず、臨床哲学としての新しい研究プランを打ち出すという方向でメチエを発行していきたい。

大学院という枠内で「臨床哲学」の活動を考えた場合、「研究」＝「論文を書く」という従来の研究スタイルを今後変えていく必要があるだろうし、その意味でも『メチエ』は積極的に新しい研究スタイルというものを提示していく自由な活動媒体として活用されることを期待したい。

今回の特集に関していえば、「セクシュアリティ」について書くということが括弧付きの「研究」ではなく、それ自身が行為・実践としてどのような意味を持ち、また持ち得ないのかということを経験者のあいだで議論した。セクシュアリティに関しては、「執筆者」は透明な主体では

あり得ないし、誰が誰に向かって書くのかという“人称”と“宛

臨床哲学の余白

先”の問題は無視することができない。セクシュアリティについて記述する者とされる者が「私」、「我々」、「彼ら」、「彼女ら」という人称のあいだでどのように引き裂かれ、あるいは併合されるのか。それとも主格／対格の問題ではなく、セクシュアリティを「誰の」という所有格で述べるのが問題であるのか。今回の特集ではこれらの問いはオープンなまま置かれているが、来るべき特集でぜひ考えてみたいことのひとつだ。

(本間直樹)